参考資料４

（１）ヒアリング記録シート（市政参加経験のある方）

ヒアリング日時	平成３０年１０月１１日（木）１１時～１２時３０分
ヒアリング実施者	＜市民参加推進フォーラム委員＞　壬生裕子副座長 ＜事務局＞　松岡みさき

＜聞き取り内容＞

市民公募委員になろうと思ったきっかけ

人の暮らしに元々関心を持っており，現在は文化人類学を研究している。

昨年度，京都府の事業の学習支援ボランティアの募集を学内で偶然見て，ボランティアとして活動した。その活動場所の施設で，チラシ配架ラックに市民公募委員募集チラシを見つけた。

自身の関心と合致したのと，学問の分野だけでなく，人の暮らしの中で，研究を活かして自分に何ができるのかと考えた結果，公募委員に応募した。

市民委員への応募は今回が初めて。ただ，中学生，高校生頃からボランティア活動をしていた。そのとき，自分ができる範囲で何ができるのか，社会に参画できるのかを考えて活動に参加していた。

市民公募委員になってみて

「自分ができる範囲で社会に参画したい」という視点で市民委員に応募しているので，応募する際に，不安に思ったことや分かりにくい点といったことは意識しなかった。

私自身も，市民委員に応募している他の同世代はどういう人なのか，どういう動機なのかが気になる。大学に通っていない社会人の方も含めて，どういう風に興味や関心をもって市政，まちづくりに参加しているのかに興味がある。

会議では，私は，せっかく参加したのだから発言しようと思っており，話しにくさなどはあまり感じない。

市民公募委員に応募しようとする市民の方は，応募する段階で既に市政に関心がある方だと思うので，積極的に発言をする方が多いとは思うが，一方で気後れしてしまう人もいるかと思う。仮にそういう人がいるなら，市民公募委員が入っている場（会議）としてもったいない。

私自身，専門分野に関することは発言しやすいが，これが，「自分の専門ではないが何かできるのでは」と思って応募した人であればなかなか発言しにくいかもしれない。

事前に資料はもらうが，それ以外に，自分でそのトピックに関心を持って勉強しないと，発言するのにすこし気後れするのではと思ったりもする。

市政参加に対する意識

私は自分の今の興味関心と合致したのがこの懇話会だったので市民公募委員に応募したが，委員になってから，他の公募委員の案内にも目がいくようになった。

例えば，京都市や府に，どういう会議体があり，どういう人が参加していて，どういう目的でその会議が運営されているのかといったことも気になり，調べた。機会があれば，他の会議にも参加してみたいなと思っている。将来的には市民委員ではなく有識者として自分がその時にいる行政の会議に参画ができればという思いは，市民公募委員として市政に参加するようになって持つようになった。

審議会，公募委員に関して課題と感じること。

予算をつけて運営している会議として，市民公募委員に応募したり，委員として内定した方が，委員になった後どういうモチベーションで会議に参画していくのかという点は課題であると感じる。もしかしたら市民委員側にも何か問題があるのかもしれないし，両者が共に考えていかないといけない課題だと思う。

また，会議は公開されているが，傍聴に来られる方はいない。議事録で確認するという方法もあるが，会議開催日，その場所だけの会議になってしまう。また，限られた時間の中で，議題すべてを解消できているかといわれると，十分にできていないかもしれない。

行政としてはコストカット等言われている中で，予算をつけて開催している会議なので，時間的なことを考えると今の形が限界なのかもしれないと思う一方，より良い方法がまだあるのではないかとも思う。こういう会議をどう活用していくのかという点では，府市に限らず，日本全国どの行政も持っている課題だと思う。

また，懇話会ごとの横のつながりとして，互いの問題点を共有できるような場があればいいのにと思う。これまで日本全国色んな行政で行われてきていることが共有できれば，前例に学ぶこともできるだろうと思う。

他都市の先進的な事例については情報は分かるものの，そこに至った経過については十分に分からない。事例だけでなく，そこに至るまでにどういうプロセスを踏んでいるのかという点について，効果的に把握できるようになるとより良い方向に進むのではと思う。

人手，予算が限られる中，どう行うのかというのが一番の課題だと思う。

若者の市政参加の実情等について

友人・知人の市政への関心度は，それほど高くはないと思う。市政は自分が参画するものだとは思っていないと感じる。

市民として自分が何をするのかというと，その行政区に暮らすし，関心のある問題に参画するということはあるかもしれないが，そもそも参加できる場（市民公募委員という制度や附属機関等という会議体）があるということを知らないし，どうやって参加するかも知らないのが現状だと思う。

公募委員の募集については個人的に「誰かに勧める」ということもあるかもしれないが，そういう情報がごく一般に目につく方が望ましいとは思う。

若者の市政参加を進めるためのアイデア

現在，どの大学もポータルサイトを持っている。大学に市から何か情報提供があった場合，全大学のサイトに「京都市からこのような情報がとどきました」という形で掲載される。今は，シンポジウムやイベントの案内が普通にきたとしても，それが認知されていない。

逆に，大学に働きかければ，大学としてはそういった場所に学生がでていくことは歓迎しているわけなので，ポータルサイト（学内専用掲示板）に載せる。ここに情報を載せるか載せないかで，この世代の認知は大きく変わるはずである。公募委員の募集があれば，学内専用掲示板に掲載するだけで，大きく認知は変わると思う。そうした仕組みが，大学が多くあるわりには今現在ない。

市政の分野に関心のある学生は，参加する方法が分からないだけで，いないかといったらそうではないと思う。大学のポータルサイトは，行政側と，大学の橋渡しの一つのツールとして，使えると思う。

ポスターや，チラシといった古典的なツールも活用できる余地はある。こうしたツールは，対象となる人が，そうしたツールがあるということを知っているか知らないか，という点が大きいものではあるが，知っている人はそうしたものからも情報を拾っている。

また，大学のような機関に所属していない人に対しては，チラシラックであったり，ホームページであったりと，旧来通りの方法がいいのかもしれない。

＜ヒアリング実施者の所感＞

＜壬生副座長＞

市政参加の方法を周知するだけでなく，参加へのハードルを下げるための工夫も重要ではないか。

対象が多様な場合，さまざまな周知方法を組み合わせることが必要ではないか。口コミが効果的な場合もあれば，チラシやポスターがきっかけになる場合もある。

＜松岡＞

学生のように，なんらかの機関に属する人に対して市政の認知を向上させるには，大学のポータルサイトのように「全員が見る」という媒体での広報が効果的であることに気づけた。

（２）ヒアリング記録シート（市政参加経験のある方）

ヒアリング日時	平成３０年１０月１５日（月）１５時３０分～１７時
ヒアリング実施者	＜市民参加推進フォーラム委員＞　内田香奈副座長，菅谷幸弘委員 ＜事務局＞　福田達也

＜聞き取り内容＞

市民公募委員になろうと思ったきっかけ

市民公募委員の活動としては，今の委員会で委員になる前は，別の京都市の審議会で委員になった。任期は２年であり，学部４回生のときに委員になった。

ひと・まち交流館でチラシをもらい色々と見るのが好きで，そこで公募委員の募集チラシを見て，それに興味を持った。

大学で自分が学んでいる専門領域であり，自分の研究は過去の事例だが，行政が実施している最先端のことについて聞けると思い，面白そうだと感じ，市民公募委員に申し込んだ。

自分の力を活かせるというよりは，行政が今何をしているのかを知りたかった。

現在の審議会の委員になったきっかけは，市役所からのお知らせにより公募委員の募集があることを知り，興味を持ったので申し込んだ。

応募の際の論文については，「市民公募委員になりたいな」と思い，「書こう」と思って書けたので，特にハードルではなかった。文章が書けなくて応募を諦める人もいるのかもしれないが，私の場合は普段から文章を書いていたからか，そうではなかった。

市民公募委員になってみて

最初，２年間の公募委員は，自分が大学・大学院で専門としてやっていることであり、何か現場で役立ててもらえるような発言できたらと思ったが，なかなかうまく意見をいうのは難しかった。年間４回の会議があり，委員の時には８回開催されたが，あっという間で，やっと慣れてきた頃に終わってしまった印象である。

会議は，１回ごとにテーマ設定があり，それに対して議論する形であるが，テーマ以外にも自由に議論できる機会もあった方が，それぞれの委員の意見を反映させることが出来ていいのではないかと思う。

今の審議会では，毎回会議の前に事前説明があり，丁寧に資料等を説明してもらい，理解を進めながら会議に出ている。普段，関心を持つことのない分野だったので，専門的なことも含め，興味深く参加している。

市政参加の手応え

公募委員になって，行政の仕組みを理解し，知らなかったことを知ることで勉強にもなっている。

自分の意見が議事録にも載り，行政の運営に何らかの反映がなされることは期待できる。しかしながら，年４回・１回２時間の会議だけでは単なる事実確認で終わってしまったり，会議の中でテーマを深めることが出来ないことも多く，直接的に手応えを得るのは難しい。

また，公募委員以外の場では，行政に意見を行ったり，相談しに行くというのは難しく感じる。

若者の市政参加等の実情について

自分の周りで言えば，それぞれで自分の興味のある活動を熱心にやっており，行政に参加しなくても，自分の活動で満足している，ということがある。まちづくりの活動であったり，ベ

ンチャー企業へインターンに行ったり，社会貢献的な活動をしていたり，サークルに熱心に参加していたり，ということで，市政に興味を持ってもらうためには，それ以上に魅力のあるコンテンツを提供する必要があると考える。

また，「若い人に市政に参加してもらって，行政は何をしたいのか」という点が見えてこないのが問題だと思う。

市民公募委員でいうと，色々とハードルが高すぎると感じる。審議会の委員には，基本的に大学の先生，専門家が在籍され，行政の職員もその場にいる。「市民」というものが，普段から様々な活動を熱心にしていたり，「意識の高い人」のみを対象としているように思ってしまう。若者の市政参加を進めるためには，さらに多様な若者が気軽に参加できる仕組みを整えて行く必要があると考える。

また，まちづくり活動についての若者の例でいえば，自分の地元では周りとつながりが深すぎて面倒だと感じたりする反面，地元と適度な距離感がある場所では，まちづくり活動を支援したり，周りとうまく付き合いたいという気持ちがあったりすることもある。地域との繋がりが希薄化する中で，新たな地域との繋がり方が模索されていければと思う。

若者の市政参加を進めるためのアイデア

きっかけづくりとして，大学等のボランティアセンターと一緒に何かするなどもあるかもしれない。

自分の経験ではボランティア活動は，自分の居場所になったという点でメリットのあるものだったので，人のための活動とは思っておらず，自分の中では，ボランティアではないと思っている。そういう意味でいうと，市民公募委員も，「市民公募委員」と言わない方がいいのかもしれない。軽く，ふらっといって，しゃべる，みたいなことが伝わる方が敷居は低いのかもしれない。

また，市政参加の制度上でハードルを下げるという点では，働く人が参加しやすいよう，平日夜や休日に審議会を開催することも必要ではないかと思う。

公募委員の募集の際に，初めての人にもわかりやすいチラシを作成することや，会議自体も説明を丁寧に行ったり，専門家でなくても発言しやすい雰囲気をつくるなど，工夫が必要であると思う。

＜ヒアリング実施者の所感＞

＜内田副座長＞

若者の市政参加の促進に当たっては，若者に参加してもらっても何をしてもらいたいのか，ということがはっきりしない，若者に伝わっていないということも問題かと感じた。若者も，他に沢山興味を引く活動がある中で，何を求められているか分からない場に行くのは難しいだろう。

＜菅谷委員＞

まちづくり活動の例でいえば，若者に運営をすべて任せる，といった方法で行うことにしたら，現在まで続けられたというものがある。子育て世代の方が運営しており，そのイベントが若者の地域に入る際の一つの入り口になっている。若者の参加には，大人側の器量が一定，求められるものと感じる。

（３）ヒアリング記録シート（市政参加経験のある方）

ヒアリング日時	平成３０年１０月１７日（水）１０時～１１時３０分
ヒアリング実施者	＜市民参加推進フォーラム委員＞　大鳥井悠真委員，森川宏剛委員 ＜事務局＞　松岡みさき

＜聞き取り内容＞

市民公募委員になろうと思ったきっかけ

所属するゼミの教授から，市民公募委員を募集していることを聴き，応募した。先生に声をかけてもらうまで，そうした制度があるとは知らなかった。尊敬する先生からのお話だったので，それならやってみようという思いと，新しいことに挑戦したいという思いから応募した。

政策的に興味がある分野だった。また，他府県出身であるので，観光都市である京都市の対応について知ることができれば，地元にも還元できることがあるのではないかと思った。

誰でも参加できる，という形ではなく，客観的なフィルターをかけて委員を選ぶ過程は必要だと感じており，公募委員に応募する際の論文作成は，自分にとってハードルではなかった。

自分が研究している専門分野ではないため，公募委員の応募を決めてから関連する社会問題について調べ，考えを深めた。

市民公募委員になってみて

どのような服装で参加すればよいのか，ということでまず悩んだ。

当日資料が事前（2 週間前）に送られてきたので，まずはその資料に目を通し，これまでの議論を確認した。その他はインターネットにより情報収集し，社説になっているような内容に目を通した。どういう点が問題視されているのかなど把握に努めた。

初めて会議に参加する際は，学内で見知った法学部の教授の方もいて多少入りやすくはあったものの，色々な世代，職業の方が委員として参加しているので，とても緊張した。

委員に就任して以降，これまで会議は１回開催されており，自分も１回参加した。元々，年に１回～２回の開催とは聞いており，そういう点では参加のハードルは低かった。

前回は，事務的な報告の時間が多かったため，発言機会は１度だった。的外れなことを言っているのではないかという不安があり，少し発言しにくい部分はあった。ただ，学生として審議会委員になったので発言したいと思っており，思ったことを発言することができた。次回会議ではもう少し発言したい。

市民公募委員になった手応え

市民公募委員の役割というのは，自分自身の立場から思うことを発言することだと考えている。京都に暮らす一大学生として，率直な意見を言うことを心掛けていた。この審議会に学生として参加していることが審議会にとって重要であると意識し，そういう，京都の大学生を代表して自身が選ばれているという構造も意識して発言しようと思う。

審議会の委員の活動は，会議の参加，発言であるので，もう少し他に何か活動できればという気はする。次回の会議の参加，発言に向けては，普段の生活の中で，会議に関連することに注意を払うようになった。

一方で，実際に自分が行政職員だったらという視点で考えると，このような審議会の在り方については気になる点もある。活動が活発になると負担は増えるし，かといってあまり活動し

ないのもどうかとなる。審議会で支払われる報酬のことなどを考えると，財源をフルに生かす形で活動できればよいのではと思う。

市民公募委員になって良かった点

良かった点は二つある。一つは，様々な年代，職業の方が集まって，一つの社会課題について議論するということ。普段同世代と話している中では出てこない，自分と違う視点からの意見が出るので，自分自身新たな価値観に気づかされた。

二つ目は，行政職員に興味があったので，学生のうちに審議会という取組に参加する経験が積めたことである。

他の学生に勧める際に注意すべき点としては，審議会委員になると会議で発言を求められるので，関心が無いテーマの審議会委員になっても発言するハードルが高く，積極的に発言するのは難しいと思う点である。興味のない審議会の委員になるのはお勧めできない。

若者の市政参加の実情について

社会課題を見つけて取り組もうとする方は，周りにそんなにいない気がする。

私は，活動するきっかけが重要ではなく，知って，やってみることが大事だと思っている。

実際にやってみて大変さが分かったり，新たに知ることがあったりすると思うので，就職活動での PR に利用するためにボランティア活動をするなど，活動する動機については色々あってよいと思う。

活動を始めた動機がどうあれ，市の活動に積極的に参加するうちに，それが市政参加の新しいきっかけになる可能性もあると思う。

市政参加を進めるためのアイデア

自由な時間があり，自由に選択できる大学生活の中で，大学側が様々な出会いの機会を作るというのは大事だと思う。ボランティアや審議会という場があるといったことを知れる場があれば，そうした場で知り，活動してみて初めて気づかされることがあると思う。自分は，審議会に参加してみて，市政に参加する制度や世の中の仕組みが少しずつ分かり始めている。

無作為抽出で人選し，本当の市民の代表に会議に委員として入ってもらえればよいのではないか。裁判員裁判のような形で，選ばれて初めて会議に入り，協議していくということである。普段は市政に関心が無いけれども，市民の一人として普段何を考えているのかということがそうした仕組みですくい取れれば，おもしろいのではないかと思う。

また，今後の地域振興を担うことを考えると，ずっと地元に在住し，生活している人たちをどう巻き込むか，ということが大事であると思う。

若者の市政参加を促すのに，直感的に一番大事だと思うのは，報酬を出すことである。学生も時間を割いて参加する。市政参加は，将来的には自分の身になることだが，今の時点で気づける人は少ない。

限られた予算の中で難しい部分もあるかもしれないが，報酬に興味を持つ学生は多いと思う。就活にも有利だし，いい経験にもなるし，報酬ももらえるという形であれば，是が非でも参加したいという学生はいるのではと思う。友達に紹介しても皆それを知らないのが現状である。

＜ヒアリング実施者の所感＞

＜大鳥井委員＞

ゼミの教授など周りにいる大人の声掛けなしに，若者が自ら市政参加の機会を見つけることは難しいように感じた。

参加にあたっては，若者独自の不安があるので，なくしていくことが必要で，それが参加のハードルを下げることにもつながるかもしれない。

審議会など，開催頻度が少ない制度は手ごたえを感じづらくなるが，高くなると参加のハードルも高まるので，もう少し活動してみたいという気持ちが生まれたときにできることを考えていく必要があるのかもしれない。

＜森川委員＞

若者の市政参加のきっかけとしては，京都市政に近い場所にいる気の利いた大人が若者に声をかけないと，若者はそうした制度に気がつかないのかもしれない。そして，そうした大人とつながっている若者に，市政に参加するチャンスがあるのかもしれない。

社会人経験のない学生は，会議に出席する際の服装といったことから悩むので，そういう点についてケアしてもいいのかもしれない。

無作為抽出した方に審議会委員として入ってもらうというのは，方法的には難しいかもしれないが，きっかけをつくるという意味では面白いかもしれない。